
リピーテッド バースデイ

shonis

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リピーテッド バースデイ

【Nコード】

N7998Q

【作者名】

shonis

【あらすじ】

繰り返される僕の誕生日。

そこで起きる、ある事件。

僕は無事に、ループから抜け出せるのか。

そんな、僕と彼女と親友、三人の物語。

第一話（前書き）

処女作です。分かりにくさ、誤字、脱字あるかもしれませんが、温かい目で見てください。

どんなコメントでもいただけると嬉しいです。
スローペースで書いていきたいと思っています。

それでは、少しでも楽しめたら幸いです。

第一話

僕は走っていた。住み慣れた住宅街を抜け、バス停まで走る。

照りつける太陽がまぶしい。汗が滴り落ちる。九時キックオフだった。左手を見る。十一時三分。完全に遅刻だ。住宅街のはずれにあるバス停には誰もいなかった。時刻表を確認する。ちょうど五分前にバスは発車していた。息を軽く整え、ポケットに手を伸ばす。携帯を取り出し、山下監督に電話をかけた。山下監督は定年間近の男性だ。サッカー経験もなく、意欲的ではない人だ。たいして怒らないだろう。僕はそう思っていた。だから、何も考えずに「あ、すみません、監督。倉田です。倉田幹久です。寝坊しちゃって、今、向かってます」と言ってしまった。まさかすでにチームは不戦敗になっでいて、試合もせずに後片付け待ちしているなんて思いもしなかった。

「そうか。早く来い。みんな待っているから」いつもどおり、抑揚のない声だった。

「すぐ行きます。30分ぐらいで着くと思います」僕は電話を切った。バスの来る方向を見つめる。まだバスは来ない。空はきれいな晴天だった。

けたたましい音に起こされた。何事かと飛び起き、原因を見つめる。「ジリリリリ！」昨日から僕の部屋に来た新しい時計だ。新しい真つ赤な爆音時計。心臓が激しく高鳴っているのがわかる。頭も痛い。六畳半の殺風景な部屋にこだまする。「想像以上だ」ため息まじりに呟きアラームを荒々しく止めた。殴り止めた。きれいなディスプレイに十一月二十四日と表示されている。僕の誕生日だ。間違はなく十六年生きてきて、最悪な誕生日だ。「どんなお寝坊さんでも、必ず起こせる優れものですよ。」と言った時計屋のお姉さん

の言葉を思い出す。なにもこんなにうるさくなくても。心臓に悪いじゃないか。耳鳴りがする。ハムスターなどの小動物なら、シヨック死しそうなくらいだ。ふとトラさんの様子が気になった。布団から出るのもわずらわしく、布団に入ったままの状態で、半開きの目を水槽にやった。身動きひとつせずミドリ亀のトラさんは何か言いたそうにこつちをじつと見ていた。愛嬌いっぱい顔にオレンジと赤い模様がある。男前だ。ミドリ亀界の中でもトップクラスに男前だと僕はそう思っている。「幹久、うるさいじゃないか。気持ちよく寝てたのに」そんな言葉が聞こえそうだ――

「ごめんよ。悪いのは全部あの爆音時計のせいなんだ。ぼくじゃない」

「いや、幹久のせいだ。いつつも寝坊ばつかするから、ボクまで巻き込まれるんだ。すこしは反省しろよな」

「反省しているよ。だからあの時計を買ったんじゃないか」

「だいたいキミの寝坊の原因はいつも二度寝だろ？一度は起きるけど必ずと言ってもいいほど二度寝する。あと五分、あと五分。こんな感じにだ」

「それはちゃんと分かっていたんだけどなー」それでも買わずにはいられなかった。こんだけうるさいと、もう一度セツトするのも憚られる。近所迷惑だし、トラさんに怒られるよな。「あーもう、忘れずにセツトしろよ。幹久」そんなトラさんのことばがしたような気がした。そんなことを考えているうちに、いつの間にか二度目の眠りに落ちていた。

「幹久。幹久！」

「なに？トラさんどうしたの？」寝ぼけた声でそう答えた。

「トラさん？なに寝ぼけてんだ」豪快に布団を捲られる。父だ。トラさんではなく父だった。恥ずかしい。あわてて布団を手繰り寄せる。鼻の下まで布団をかぶる。父の前で醜態をさらしたことは思春

期の僕には耐え難いことだった。

「たくつ、もう八時だぞ。さっさと起きるか」

え！飛び起きた。またやってしまった。また寝坊。昨日の失敗が全く生きていないじゃないか。時計を見た。七時半だ。もう一度見る。七時半だ。……七時半じゃないか。だまされた。ふー。父は二ヤニヤしている。父は僕を起こすときわざとぎりぎりの時間だと嘘をつく。毎回それならだまされないのだがたまに本当の時もあるから性質が悪い。

「いま起きるよ」

僕は頭をくしゃくしゃと手で搔き毟りできるだけ平然を装いそう答えた。ん？右手でさすった後頭部に違和感を覚えた。

「なんか頭痛いんだけど」

鈍い痛みがする。何かにぶつかっただような痛みだ。内側からも外側からも小さなおじさんがせつせとハンマーで殴っているみたいだ。痛みには波がある。頑張れば我慢はできるけど、やめてくれないかな。小さなおじさんがせつせとハンマーで僕の頭を殴ってる場面を想像すると笑いがこみ上げてくる。笑えないほど痛いんだけど。給料いいのかな？あれ？そういや頭ぶつけたっけ？傷はないみたいだけれど。

「頭痛い？寝すぎだろ」父の冷たい返事が返ってくる。

寝すぎ？そういや昨日いつ寝たのか覚えてないな。あんなことがあったんだから、いつの間にか寝てしまうのも無理ないよな。それより、頭が割れそうに痛い。父はあの新しい時計を撫でながら、

「今日から東京に出張だからな。金曜日の夜には帰ってくるから。

明日から、ちゃんと一人で起きれよ」

痛みが激しくなる。おのれちっちゃいおじさんめ。呪うことに必死で父の言葉も頭に入らない。

「あんさ、今日頭痛いから休んじゃだめ？」答えは分かっている。でも一応聞いてみた。

「ダメだ」即答だった。

「いいから頑張つて行きなさい」

「明日からはがんばっていくよ。だから今日は休ませて。お願い」
ぼくは両手を顔の前で合わせ懇願した。

「幹久。明日から頑張るんじゃない。今だけ頑張るんだ。そうやって生きる。わかるか？今日だけががんばるんだ。明日から頑張るじゃ、きっと明日も明日から頑張るって言うんだよ。いつまで経っても明日からだ。何も変わらないじゃないか。だから明日からじゃない。こう考えるんだ。今日だけががんばろう。明日のことは横に置いて、今日だけががんばろうって。そうやってずっと今日だけががんばろうって考えれるやつはうまく行くんだ。わかるか？」

「わかんない」父の口癖だ。自分も出来ないくせにと心の中で悪態をついた。父は少し間をおいて、じつと僕の顔を見つめ面倒臭そうにこう答えた。

「まあいい。お前な、誰でも失敗くらいするもんだ。今日行かなかつたら明日も行きにくくなるだろ。今日失敗を挽回せずにいつ挽回するんだ」――失敗！？心臓が跳ね上がる。失敗。父のこの言葉が僕に重くのしかかる。

「逃げてちゃ手遅れになるぞ。いいからさっさと準備しなさい。それにピンチはチャンスだつて、父さんいつも言ってるだろ」

父は、僕が学校に行きたくない理由を、頭痛のせいではなく、昨日の失敗のせいで仲間にあわせる顔がないからだと思っているのだろう。実際そうなのかもしれない。

「わかったよ」話をさっさと切り上げるようにそう言った。

昨日僕は大きな失敗をした。サッカーの試合に遅刻したのだ。もちろん寝坊が原因だ。小さな大会とはいえ県内6チームが集まる機会はそうそうなかった。日頃の練習の成果を確認できるいい機会だった。

「いくら弱小チームでも不戦敗は避けたかった」浅尾キャプテンの言葉がよぎる。チームメイトの冷たい視線を思い出しぞっとする。監督はずっと無言だった。僕たちの部には12人しかない。部員

12人のチームじゃ一人でもいなくなると死活問題だ。まさか僕が寝ている間に不戦敗になっっているなんて夢にも思っていなかった。僕ひとりいなくても試合はできると思っていた。運が悪いことに、僕だけでなく、その日はあきらまで来ていなかった。もちろん10人では試合ができない。当然僕らのチームは不戦敗になっていた。戦犯はもちろん僕、そしてあきら。よく知らないが、あきらには事情があつたらしい。でも連絡がなかったみたいだ。僕もちゃんと言い訳考えるんだった。卑怯な考えが頭によぎる。

「そうそう俺がいなくても明日もちゃんと行くんだぞ」そう言つて、父は僕の部屋を後にした。ふーと大きなため息をつく。さて、さつさと準備するか。汚名を返上するには行動で示すしかない。頑張れるのだろうか。少しだけ不安だ。もう一度みんなに謝るか。ベツト棚の上をじつと見つめる。もう二度と使いたくない。「これ返品できないかな」

階段をかけ降りると、玄関に母と父がいた。母もどこかに出かけるみたいだ。

「おはよう。ちゃんと自分で起きなさいよ。お父さんも朝忙しんだから。お母さん当番だからもう行くね」靴を履きながら僕に話しかける。

「朝メシは何？」

「勝手に何か食べなさい。高校生なんだからできるでしょ。じゃ行つてくるね。カギ忘れずに閉めてね。」

「てか、なんの当番なの？」

「昨日言つたでしょ？小学校の近くの交差点で立つやつがあるって」母は、呆れながらそう答えた。そういえばそんなことを言つてた気がする。子供たちが安全に登校できるようにするやつ。

「ふーん、まあ頑張つて。いつてらっしゃい」

「もう。じゃあお父さん行きましよう。幹久。戸締りお願いね。そろそろ誕生日おめでとう」と母が笑つた。続いて、

「幹久。ちゃんと学校行くんだぞ。そうそう誕生日おめでとう」と笑いながら父は母の真似するように言った。

「うん。ちゃんとするよ。できる限りね」と笑って答えた。

リビングからテレビが流れている。いつもの番組。トーストと牛乳で軽めの朝食を食べながら、じっとテレビを見る。そろそろ占いが始まる。少しアニメ声っぽい女性の声だ。

「今日一番運勢がいいのは、さそり座のあなた。何をしてもうまくいきそう。ラッキーアイテムは赤い手帳」残念。一番じゃなかった。一番じゃなくてもせめて上位5以内には入りたい。しかし、待てど暮らせど、なかなかいて座が呼ばれない。とうとう残すは最下位だけになった。

「今日最も運勢が悪いのはいて座のあなた。大事なものをなくしそう。友達の助言には耳を傾けてね。ラッキーアイテムは傘」全然悪びれることもなく平然と、僕を、いて座を一番運がないとアニメ声で言い切った。占いはいい結果だけを信じ、悪い結果の場合は気にしない。いつもの僕はそういうスタンスだ。でも、今日だけは気にせずに入られなかった。傘を持って行こうかと思ったけど、僕の地域は降水確率0パーセントだった。ラッキーアイテムも使えないなんだよ。テレビを消し、学校に向かった。外は清々しいほどの曇天だった。

吉田可奈と付き合い始めて10ヶ月になる。僕から声をかけたことがきかっけだ。いつものコンビ二の前に、いつもどおり少し遅れて着く。かなは肩ぐらいまでの長さの髪で少し内側にカールしている。退屈そうに髪を指でクルクルしている。

「おはよう」

「おはよう。幹久君遅い。もう諦めてさきに行こうかと思ったよ」口をとんがらせて、かながいつもどりの文句を言う。

「ごめん、ごめん」頭の後ろを手で掻きながら謝る。これもいつも

どうりだ。いつもと違うのはちっちゃいおじさんの痛みがあることだけ。僕たちは並んで学校に向けて歩きだした。

「あ、幹久くん。誕生日おめでとう」

「お。ありがとう。父さんも母さんも適当でさ。一人息子の誕生日なのに。父さんは出張だし。別にいたらいたらで面倒なだけなんだけどさ」

「はは。じゃあ、おばさんと二人きり？」

「うん」

「じゃあ今日は早く帰ろうか。おばさんに悪いしね」

「うん。なら先に部活終わった方が校門の前で。今日は美術部とサッカー部どっちが先に終わるだろうね」

「サッカー部じゃない？昨日試合だったんでしょ？だったら、今日は軽目なんじゃないの？」

かなの言葉に昨日の失敗が思い出された。かなになんて言おう。あまり言いたくないな。

「どうしたの？」

「ん、なんでもない」

「今日なに食べようか？」放課後のデートの話で話題を変える。

「んー」

そついや、戸締りちゃんとしたっけ。少し不安になった。石ころを軽く蹴りあげる。車道に転がる。

「ケーキ食べたいな」かなの嬉しそうな声につられて僕も笑った。

「倉田。くらた！」

僕を呼ぶ声がする。前の方に、校門に向かう階段から金髪、長身の男が手を振っている。あきらだ。南あきら。僕と同じ戦犯の一人だ。乾いた笑いがでる。あきらが走ってくる。

「お前、昨日試合遅刻したんだって？しかも寝坊で。不戦敗になったんだろ？」こいつ。怒りがふつふつと湧いてくる。まだかなに切

り出していないのに。ため息をぐつとこらえる。

「あきらも来なかっただろ？なんで？」

「ああ、えりがな……」アキラはバツが悪そうに下を向き呟いた。

「妹ちゃん、どうかしたのか？」

「まあ、ちよつとな」

「そつか。それより後で一緒に謝りに行こうぜ」

「ああ」

「それよりもしかしてまずかった？」あきは、かなの方を見る。機嫌が悪くなっている、どうしよう。ふーと息を吐く。

「えーと、かな。その……」言葉が続かない。しどろもどろになる。

「幹久くん。どういうこと？」

「幹久君が寝坊したせいで、不戦敗になったの？」大きな目で僕を力強く見つめる。いつもより大きく感じる。

「うん。反省している」小さな声で答えた。

「幹久くん、かつこ悪い」自分でも確にかつこ悪いと思っていたけど、彼女にそういわれたことはショックだった。

「じゃあまた放課後ね」

かなは一人で行ってしまった。登校中の生徒にまぎれる。かなの小さい背中はあるという間に見えなくなった。かなとは別々のクラスだがいつも教室前までは一緒だ。

「悪い。倉田。悪気はなかった」何か納得しない気持ちだ。

「そうそう誕生日おめでとう」ニヤニヤ顔でそういった。

ホームルームを告げるチャイムがなる。僕たちは慌てて走り出した。

僕たちの校舎はとても古い。築六十年くらいだそうだ。いたるところにシミができ、コンクリートの壁、天井にはヒビが入っている。独特の匂いと薄汚さからか夜になるとさながらお化け屋敷みたいになる。近くに店がないうえに人通りも少なく、明かりもほとんどな

いことがその怖さを増長する。その校舎も近いうちに改修工事をするそうでその関係者をよく見かける。靴箱付近でその関係者に走りながら挨拶を済ませ、三階の教室までへの階段を駆け上がる。これくらいで息を切らすことはない。腐っても僕はサッカー部だ。教室の前に着く。僕は思いつき後ろのドアを開けた。

教室に入ると、僕達に冷たい視線がそそがれた。サッカー部のメンバーからだ。田中が近寄って来る。でっかい図体だ。百九十近くはある。相変わらずスポーツ間違えてんだろ、僕は心の中でそう突っ込んだ。いやいや、ちゃんと謝らないとな。

「またギリギリか」

「今日は遅れずに来れるんだろうな？」低い声で尋ねてきた。感情を押し殺しているのだろう。彼は誰よりもサッカーを愛してた。不戦敗という結果に憤りを感じても不思議じゃない。怒鳴りつけたいのを我慢しているのが僕にもわかった。

「ああ、必ず行く。昨日みたいなことは二度と起こさないと誓うよ。迷惑かけてすまんかった。反省してるよ」教室中に不穏な空気が立ち込めている。いつもより教室が暗く狭く感じる。

「お前みたいにあたっぴでもやる気がなくてもうちには必要なんだ。次は絶対許さないからな」

「キャプテンから何か罰があるらしい。それで許してやるよ」田中はあきらのほうを向いた。

「あきらも、バイトもあるし妹さんのこともあるんだろうけど、連絡くらいできるだろう。電話にも出ねーしよ」

「知ってるのか？」あきらは机の上に座り、見上げて尋ねた。エリちゃんのことだろう。僕も知らないのに、田中は知ってるのか。

「詳しくは知らん。大変だったということしか知らん。でも特別扱いする気はない」田中は僕らに向け低い声で、感情をたっぷり込め「人数さえいれば、お前ら辞めさすのに」最後の言葉にはさすがに堪えた。

ほかのメンバーにも謝罪を済まし、席に向かった。グラウンド側の後ろから三番目の席だ。グラウンドと校門がよく見える席だ。もう完全に遅刻だからか三年生の遅刻者が歩いている。見分け方はリボンの色だ。男子はネクタイ。僕たち二年生はえんじ色だ。歩いてる女子高生は深い緑なので三年生だ。あれよりかはましかな。完全に遅刻でも僕は歩きはしない。

「倉田君。おはよう」右後ろから声がした。

「うん、京子ちゃんもおはよう。」僕は腰を下ろし、かばんを落書きだらけの机にかけた。

「不戦敗だつて？」田中とは違い、からかう感じで聞いてくる。

「うん」田中たちの視線を感じる。

「寝坊しちゃって。反省しているよ」京子ちゃんはいまどきのギャルという感じだ。化粧もしているし、髪も染めている。かなとは正反対の人種だ。

「なんか、倉田君らしいね」

「そうだね。まあ遅刻魔だし。朝苦手だし」本当に朝が起きられないんだよな。あの爆音時計も役に立つのだろうか。心臓に悪いからあまり使いたくないのだけれど。そこそこな値段がしたから使わないともったいないよな。

「そうそう昨日時計買ったんだよ。目覚まし時計。これがうるさくてうるさくて」

「はは。一応反省してるんだね」京子ちゃんはうんうんとうなずきながら話を聞いている。

「うんまあね。でもうるさすぎて二度寝しちゃった」

「え？どういこと？」不思議そうに僕を見つめる。アイラインがくつきりだ。

「いや、あまりにうるさいから近所迷惑だと思ってすぐにとめたんだけどさ、あとちょっとだけって寝てしまつて。うるさいからアラームかけたくなかつたし」腕を大きく使って身振り手振り説明した。「ふーん、意味わかんないや。まあ今日は遅れなくて良かったじゃ

ん」京子の白い歯がこぼれる。

ドアが勢いよく開けられる。先生だ。

「おい、席に着けー、ホームルーム始めるぞ」

京子ちゃんと会話を終え、前を向いた。今日の黒板は珍しくきれいだ。担任の岡村先生が入ってくる。今日もつなぎ姿だ。ところどころにペンキがついている。岡村先生は、体格もよく、熊に良く似ているが、顔に似合わず美術の先生だ。油絵を得意としていた。一度、かなに先生の作品を見せられたことがあるが力強さと優雅さを兼ね備えたすばらしい絵だった。僕は絵のことは良くわからないが、単純にうまいと思った。岡村先生は教壇に両手を着きながら、簡単に連絡事項を述べると足早に美術室に向かっていった。

一日の終わりを告げるチャイムが鳴る。部活動生があわただしく練習の準備をし始めた。それ以外の一般の帰宅部生徒は、帰宅の準備をしている。教室がざわめきで包まれている。空を見つめた。朝と変わらず、曇天のままだ。一足早く、家路に着こうしている生徒が見えた。僕も帰りたいな。部活のことで、今日は授業に集中できなかった。ちっちゃいおじさんも騒がしかったし。あきらがいることで精神的に楽だとはいえ、僕の理由は寝坊だ。あまりに情けない。何と謝ろうか。大きなため息をついた。

「え。あきら今日来ないのか？」一人で部室に行く勇気がなく、あきらを誘ったとこだった。背筋が凍った。もう教室にはほとんど人はいない。そのためか僕の声が良く響く。戦犯は僕一人になるのか。気が重い。

「悪い。今日バイトなんだ。それに妹の面倒も見ないといけないし」うつむき申し訳なさそうな声でそういった。

「うそだろ？本気かよ？部活はどうするんだよ？」僕は出るか出な

いかを聞いているんじゃないかった。昨日の事があってよく休めるな。無理してでも出るべきじゃないのか。そう思った。あきらはまっすぐ僕を見つめ、すつと息を吐いた。

「倉田、おれ部辞めたんだ。部活じゃなくてもサッカーできるし」心臓が飛び上がった。頭の後ろが熱くなる。あきらは田中ほどじゃないけど、サッカー大好き人間だ。ぼくはそう思っている。そして才能がある、ゴールに対する嗅覚がずば抜けている。有名私立から推薦の話が来たほどだ。金銭面が理由で辞退し、僕と同じ公立高校を選んだらしい。始めは情熱もちゃんとあった。初めてあった日に絶対全国に行くって言った。家庭の事情やバイトで練習に來ない日が目立つけど、あきらの練習姿勢のおかげか、誰も非難するものはいなかった。そんなあきらが辞めるなんて信じられなかった。信じなくなかった。

「なんでだよ？おまえが辞めたら、だれがフォワードするんだよ。おまえは僕と違って、実力があるんだ。才能があるんだ。それに高校のサッカーがどこでもできるわけないだろ。外でサッカーするのと、高校でサッカーするのが同じじゃないのくらいわかってんだろ」みんながこつちを見る。寝坊で昨日の試合をぶち壊したぼくが言える言葉じゃないのわかってはいるけど、思わず出てしまった。

「全国行くんじゃないのだったのかよ」

「行けるわけないだろ」練習後のトンボがけの最中だった。二人とも泥だらけだ。汚い体を気にする様子もなく、デコボコになったグラウンドを必死にきれいにする。

「行けるんだよ。なんたってこの俺がいるんだから。いいディフェンスがいれば試合には負けない。いいフォワードがいれば試合には勝てるんだ」

「なんだよそれ？僕らには無理だよ」

「俺がいいフォワードで、いいディフェンスはお前だ。倉田。お前は今はまだまだだけど上手くなるよ。きっと」

「だから全国行こうぜ」

「南。僕、ボランチ志望なんだけど。適当なこと言うなよな」笑った。みんなにも同じこと言ったんだろう。あきららしい。弱小チームの無謀な夢だと思ったけど、あきらなら、あきらと一緒に全国という夢も叶う気がしていたんだ。それほどあきはサッカーがうまく、情熱的だった。あきらには人をひきつけるオーラがあった。あきらのプレイを見ていると僕は自分のことをとサッカー部だといっているものかと思う。

「こんな終わり方でいいのかよ」

「……悪いな。もう決めたんだ」前髪をかき上げながらそういった。「監督とキャプテンにも言ってきた」鞆を右肩に背負い、ドアに向かう。僕のほうを振り向き、

「倉田。もう寝坊すんなよ」返事をするまもなく、あきは行ってしまった。

涙が出そうだった。もちろん一人で謝らなくてはいけないことが、悲しいんじゃない。あきらが辞めることが、辞めなくてはいけないことがショックだった。それほどまでに追い込まれていたあきらに気づかなかったことも、何の手助けができなかったことが悔しかった。

教室を出て部室に向かった。気分は最悪だった。頭も痛い。後頭部を軽くさする。軽くノックをして入る。めったに掃除もしないせいか、ほこりと汗が混じった独特の匂いがする。部室をざっと見渡す。用具があちこちに散乱している。後輩の一年生三人だけが残っている。しかし、いくら後輩だからといって、不遜な態度はいけない。彼らも被害者には違いない。ちゃんと謝らないと。それに僕は知っていた。雨の日も休まず彼らも必死に練習していたことを、練習が終わった後も田中と付き合い居残り練習していたことも。一度も練習を休んだことがないことを。だから僕は精一杯謝らないといけない。

「お疲れっす」一年の清田がまるで何事もなかったようにいった。ほっとした。でも

「昨日は本当に申し訳なかった。すまん」僕は三人に深々と頭を下げた。

「いいですよ。別に。俺らにはまだ試合、たくさんできるんで。でも田中先輩と副キャプテンはめっちゃ怒ってましたよ。もう謝りました？」清田は坊主頭をてで掻きながら尋ねて来た。

「副キャプテンにはまだだけど、田中には謝ったよ。許してくれてるかわからないけどさ」

「そうなんすか。許してもらえんといいつすね」

「まあ、さすがにあれでしたけど、今日からまた頑張ればいいですよ」青いベンチに腰かけ、眼鏡を外し、ケースに入れ野田拓也がそう言った。

「さすがにもう一度は勘弁ですけど」と付け加えた。

「本当にすまん。ありがとう」

「やっぱり、部員少ないっすよね。誰か入ってくれないすかね。交代要員もないし。誰か怪我でもしたら試合できないすっよ」清田の言葉にうんうんと野田がうなずく。

「たく」清田が野田に話しかける。

「この際未経験者でもいいから勧誘に行こうぜ」

「そうだよな。明日の休み時間から勧誘を始めるか」

あきらが辞めることをこの三人は知っているのだろうか。よく慕っている彼らはきっとショックをうけるだろう。とりあえず、あきらことは黙っておこう。もしかしたら気が変わるかもしれないし。三人は候補を挙げながら楽しそうに、談笑している。僕は一足早くグラウンドに向かった。

続々と集まってくるメンバーに謝罪をしていると、キャプテンがこちらに歩いてきた。これであきら以外全員そろった。

「倉田くん。今日から遅刻の罰として三日間、一人で片付けをして

もらうと思っている。いいかな？」浅尾キャプテンは柔らかく聞いた。いつもこんな調子だ。後輩にも丁寧に接する。誰にでも君付けで接する人だ。

「はい。やります。やらせてください。」

「みんなもそれで許してやってくれ。倉田君も十分反省している。二度とあんなことは起こさないだろう。そうだろ倉田君？」

「はい。絶対守ります」

「ちよつと待ってくださいキャプテン。甘いですよ。たった三日間だなんて」田中がすごい勢いで抗議をした。当然だ。僕でも甘いと思う。

「僕はそれで十分だと思ってる。それにあまりプレッシャーを与えてしまうと、倉田君が辞めたいと言い出すかもしれない。それだけは絶対に避けたい。」

田中の顔が歪む。そういうことが。

「わかりましたキャプテン。仕方ないですね。だが、倉田。中途半端は許さない。やるからには徹底的にきれいにしろよ」

「ああ。わかっている」

「そうだ。ついでに部室の掃除もしてくれよ。最近また臭くなってきたからな。今日とはいわないけどなるべく早くやってくれよ」反論できる状況ではないため、田中は強気だ。でもキャプテンは認めてくれるかな。助けを求めキャプテンに目をやる。

「確かに最近匂いがひどい。倉田君。それもお願いしてもいいかな？」やるしかない。断れるわけがない。

「わかりました。部室の掃除もやっておきます」

「ちよつと待ってください。あきら先輩は？あきら先輩にはないんですか？」清田が浅尾キャプテンに問いかける。その一言でキャプテンの顔つきが変わった。

「南君は今日付けでサッカー部を辞めることになった」

「え？」

「みんなに謝っておいてくれと、言っていたよ。もちろん僕も止め

たさ。でも家庭の事情だ。どうしようもない。本当に残念だが、残ったメンバーで南君の分もやっていこう」誰も返事をしない。みんなシヨックなんだろう。

「じゃあそろそろ練習を始めようか」

試合のある日は早く起きて準備をする。今日は大会だ。興奮してあまり寝られなかった。前の試合の得点シーンを思い出す。ボールがゴールを揺らすあの瞬間は最高だ。仲間との熱い抱擁や、相手チームの悲鳴。すべてが最高だ。部屋中海外のサッカー選手のポストで埋まっている壁に目をやる。十一月二十四日六時半だ。試合は九時からだったよな。集合は八時半だ。それに開会式もなかったはずだ。枕元においてある赤い携帯を引き寄せる。充電コードを抜き、キャプテンからのメールを確認する。丁寧なメールだ。相変わらず硬いな。思わず笑みがこぼれる。うん。八時半集合だ。「とりあえずシャワー浴びるか」大きくあくびをする。昨日はバイトだったから、風呂に入っていない。

急な連絡だった。部室に向かう途中だった。

「あ。南君？ごめんね。今大丈夫かな？」店長からだ。

「急に吉田ちゃん来れなくなってさ、代わりに出れないかな？ほかにだれもいなくてさ」

「何時からですか？」

「五時からお願いできるかな？六時でもいいんだけど」

「わかりました。いきます。五時にいけます」

「悪いね、助かるよ」

「いえいえ、俺も助かります」

試合の前日だったから休みをもらっていた。でもシフトを増やして欲しいと頼んだところだった。

足音を立てないように、そつと階段を降り風呂場に向かう。乱暴に服を脱ぎ、かごにつめる。風呂釜を覗く。水が入っていない。「えりのやつ。風呂沸かさなかったのか」

立ったまま頭から順番に洗っていく。立ったままだと10分もかからない。あつという間に終わらせた。冷めないうちにさつとタオルで体を拭いた。濡れたタオルを洗濯機に投げ入れ、足元にある洗濯籠の中身も豪快に入れる。スイッチを押しまわし始めた。水を貯める音と機械が動き始めた大きな音がする。洗濯は俺の仕事だ。いつもは残り湯を使うけど、今日はなから仕方ない。簡単にに髪の毛を乾かし、リビングに向かう。すでにエリがいた。ソファでくつろいでいる。パジャマ姿のまま。毛布をマントのように使っている。短い髪もあらぬ方向へ飛び跳ねている。日曜の朝はアニメを見るため起きるのが早い。

「おまえ、風呂入らなかったのか？」

「シャワー使った。一人ならそっちのが安いじゃない」

エリはプリンを食べながら、テレビに目を向けたまま答えた。プリン。昨日、俺が買ったやつだ。店長からお礼にもらったんだけど、エリがうるさいだらうからもうひとつ買った。キッチンに向かい冷蔵庫を開ける。お茶を取り出し、コップに注ぐ。ん？あるべきものがない。プリンがない。昨日確かに二つ持って帰った。妹用と母さん用。甘いものは疲れが取れるっていうしちょうどいいと思った。おれは甘いべつに好きじゃないから俺の分はいらなかった。母さん食べたのか？エリのやつまさかな…

「エリ。昨日母さん、プリン食べたのか？」

「……」

「エリ！」

「別にいいじゃん。きつといらないよ」

「それにもらい物でしょ？」

「おまえの分もちゃんとあっただろうが。なんで母さんの分を残し

「てやんないんだよ」食いかけのプリンを取り上げた。半分もない。

「なにすんだよ」

「これだけでも残してやれ。残りは母さんの分だ」

「いや！食べてごみ隠してれば分かんないでしょ。返してよ！」声を荒げる。

「おまえ！」思わず手が出てしまった。えりの右頬にビンタが飛んだ。妹を叩いてしまった。エリは顔を手で押さえ、涙を浮かべ「死ね！馬鹿兄貴！」勢いよく部屋を飛び出し、階段を駆け上がる。大きくため息をついた。なんでこうなっちゃったのか。昔は母思いのいい娘だったのに。まあ、あいつのせいなんだろうけどな。それより、まずいな母さん起こしたかな。母さんは、父が蒸発してからずっと夜は工場で、昼間は近所のスーパーで働いている。まともに睡眠時間が取れていない。父が蒸発したのは、中三の夏だった。おかげで俺は推薦の話を通る羽目になり、高校からはバイトも始めた。明るかった妹は別人になり学校にもほとんど行かなくなった。友達がいないとかじゃないみたいだけど、朝は母さんがいないからサボりやすいんだろう。おれが何度言っても行きたくないの一点張りだ。そうこう格闘しているうちに、おれが遅刻してしまう時間になる。そうなればエリの勝ちだ。毎朝のことだ。ふーと息をついた。えりが日中何をしているかおれは知らない。せめて家事をしてくれたらと思う。えりがこうなってしまったのもあれからだ。もしかしたらただの反抗期かもしれないけど、父親の影響が大きかったのだと思っっている。幸いにもあいつは借金とかを残さなかったけど、俺はまだ許すことができない。もしかしたらあいつは不倫の末に駆け落ちでもしたのかもしれない。母は何も言わなかったけれど。時計を見る。もう七時だ。テレビに目をやる。ちょうど違うアニメが始まった。エリが好きなやつだ。とりあえず朝飯を作ろう。そしてさつさとエリに謝ろう。アニメみたいだろうしな。

二階に向かい扉をノックする。

「エリ。あのアニメ始まったぞ。朝飯も作ったから」

「さつきは悪かった。さめるからさつさと降りてこいよ」そういつて静かに階段を下りた。朝ご飯はレトルトのカレーだ。おれは料理はできない。カレーをよそっているとえりが降りてきた。何もいわない。黙ってテレビを見る。

「ほら」カレーの皿を渡す。

「……」黙って受け取り食べ始める。視線はテレビに向けられたままだ。

「今日、俺試合が終わってバイトだから、帰り十時半ぐらいになるから。ご飯何か適当にくえよ」

「またバイト？」むつとしてそう答えた。

「ああ。今月稼いでおかないと年末年始ついからな。」十一月の分は、十二月十五日に支払われる。

「……」アニメに夢中みたいだ。魔法少女が魔女と戦っている場面だ。二人とも宙に浮いている。

「こいつ、モデルじゃなかったか？」前見たときモデルの仕事をしていた気がする。

「そうだったらなんなの？」

「いやモデルが戦うんだなと思ってさ」見たところ中学生ぐらいだ。最後の一口を口に運ぶ。

「ごちそうさま。食い終わったらちゃんと水につけとけよ。」返事はなかった。

部屋に戻り、エナメルの靴に、ユニフォーム、タオル2枚、替えの靴下、脛あて、そして昨日の夜入念にクリームで磨いたシューズを入れる。宝石をあつかうように磨いた。俺にとっては宝石みたいなものだ。もうずいぶん古くなったけれど。毎回練習後に必ず磨くからが大分もっている。

「足のサイズが変わらなくてよかった」

時刻表を確認する。8時3分のバスに乗ろう。いい頃に着くだろう。それまでに洗濯物を干して、食器を洗ってしまおう。静かに洗面場に向かった。

ショッピングモールでマフラーを選んだ。先月、やっとこの町にもできた。開店当時からずっと人で溢れている。娯楽がほとんどないこの町ではすぐに人々の憩いの場所になった。私もお姉ちゃんも気についている。それに明日は幹久君の誕生日。プレゼントを買いに来るにはちょうどいい場所だ。今日はお姉ちゃんと一緒に来た。「お姉ちゃん、これとかどうかな？」シンプルな赤いマフラー。立派に作ってある。小さなため息がでる。

「え？派手すぎじゃない？」

「あいつには、地味なのがいいよ。ベージュとか。茶色とか」かつかつかつと笑う。本気なのかな？お姉ちゃんはいつも適当だから。

「そうかな。いいと思うけどな」

私の幹久君のイメージは赤。それも真っ赤な赤。理由はわかんないんだけど、思い浮かべると赤だった。

「かな、そっぴやあんた作ってたじゃん？失敗したの？」

「間に合わなかったの。部活忙しかったし」本当は失敗したのだけど、からかわれるから絶対に言わない。慣れない最初のほうがたがたで、とても渡せない。

「なにそれ？」

「クリスマスには何か手作り渡すからいいの」

「ふーん」

「だったら、マフラー以外がいいんじゃないの？どうせ作るのマフラーでしょ？」

「そうなんだけど。最近寒くなってきたし」

「なら、ニット帽は？それでもいいじゃん」ウサギの耳が着いたフードを見せびらかす。

「かわいいでしょ？」

「もう、かわいいけどさ。まじめに選んでよ」

「かな、ちょっと被ってみてよ」

「おーいいじゃん。ちょ、ちょっと待って」あわてて鞆から携帯を取り出す。

「カシャ」ストラップがたくさん着いた携帯で私を撮った。お姉ちゃん、店員の視線が痛いよ。

「お姉ちゃん、怒られるよ」あわててウサギを外す。

「いいじゃん。いいじゃん」

「それよりどうすんの？」

「違う店に行く？」

「うん。とりあえずあれは保留で」赤いマフラーを指差した。

一人での後片付けは想像以上に大変だった。トンボがけやミニゴールの移動。どれも重労働だった。一時間ぐらいかかっただろうか。もう冬なのに、汗が滴り落ちる。練習の疲れもあつて終わったころにはくたくただった。地面に腰を下ろし、ふーと息をつく。白い息だ。部室の片付けは明日の昼休みにでもしよう。頭も痛いし。今日はもう無理だ。片づけ中、頭にあることはあきらのことだけだった。辞めてしまったのか。妹さんがどうか言ってたよな。確か、小学生高学年だったはずだ。どんな事情なのか考えたけど分かるはずもない。明日、あきらに聞いてみよう。俺にできることがあるかもしれない。ゼッケンとマーカーの入ったカゴを持つ。部室に持っていくかないと。校舎の時計を見る。九時少し前だった。グラウンドにはもう誰もいない。キャプテンから預かった鍵をぎゅっと握り締める。

「倉田君。申し訳ないけど先に帰らせてもらうよ。はい、鍵」

「戸締り忘れずに頼むよ」

さっきまで野球部や、陸上部がからかいに来たりしていたが、彼らももういない。明日は雨かな。そんなことを思いながら空を見つめた。暗くてよく分からないけど曇り空だった。校舎は淡く緑の光

を発している。非常灯の光だ。炎の中では緑色のほうが見やすいらしい。ん？グラウンドの入り口にずっと僕のほうを見つめる人影があった。誰だろう？女の子かな。髪が風に揺れている。かなだ。かなじゃないか。しまった完全に忘れていた。大失態だ。放課後にケーキを食べる約束をしていたんだ。それに今日は僕の誕生日だ。いつもなら帰れても今日は帰るわけにはいかなかったのだろう。寒い中ずっと待っていたのか。申し訳ない気持ちで全力疾走でかなの元に向かう。

「ごめん」

「ずっと待ってた」

「ごめん」

「うん。大きな人、田中君？から聞いた。罰だってね」

「怒って、る？」

「せっかくの誕生日なのにね。でも幹久君の行いが悪かったんだから仕方ないよね」

「ごめん、あきらのこと考えてたら、かなのこと忘れてて。さきに言うべきだった」

「え？」

「あきら、サッカー辞めたんだ。でも明日また説得しようと思う」

「そう」

「もうお店も閉まっちゃったよ。遅いからもう家に帰らないと」かなは持っていた袋をくしゃっと握り締めそうだった。

「ごめん、明日も明後日も遅くなるから、ケーキ、また今度でいい？」

「…別にケーキなんていらない」

「幹久君、私もう帰るよ」

「え？もう遅いし送るよ。十分くらいで帰る準備できるから」

「いい。一人で帰れる」

そういつて、僕のお腹に袋を投げつける。

「誕生日プレゼント」かなは赤い目をゴシゴシこすりそう言って走

り去っていった。

中からマフラーがこぼれる。手作りみたいだ。

やばい。これはまずいんじゃないか。かなは足早に立ち去る。

「かな！まって」マフラーを手に抱え追いかけた。

グラウンドを出ると田中に会った。

「おい。倉田」

「悪い、急いでるんだ」

「あ？おまえ片付け終わったのかよ」

「悪い。すぐ戻ってくるから」田中を振りきり走りだす。

「おい倉田！ちっ」

校門を出て、あたりを見回す。右のほうに人がいる。違う。かなじゃない。スピードを緩めることなく、坂を下りカーブを曲がる。見つけた。かなだ。

「かな！」回り込み、かなの両肩をつかむ。息が上がる。

「ごめん。ほんとうにごめん。だから――」かなは泣いていた。涙をいっばいに浮かべ見つめてくる。

「幹久君」

「なんで泣いてるの？」

「わたし、幹久君のこと好きだよ」

「幹久君は、サッカーのほうが大事なんだよね？あきら君のことのほうが大事なんだよね？」

「ちよ、ちよと待って。なんでそうなるの？」

「かなが大事に決まってるんだろ」

「私のこと忘れてたじゃん。あきら君のこと考えてたって」

「朝だっていつつも遅刻するし。私との時間全然作ってくれないじゃん」顔をくしゃくしゃにし、さらにぶわっと泣き出した。かなは僕の手を肩から払った。ぼくは右手に持っていたマフラーをとりあえず簡単に首に巻いた。

「ごめん。そんなつもりは全然なかった」

嗚咽が激しくなった。必死に声を絞り出す。

「そのマフラー。頑張つて、編んだんだよ。最初のほうは、難しく
て、がたがたで、いびつで、みっともないけど」涙を小さな手で必
死に拭う。絵の具がついた小さな手だ。

「新しいの、店に、買いに、行っただけで、どうしても、あげた
くて」手に収まらない程、涙をぼろぼろこぼしている。

「うん。ありがと。大事にするよ」かなの体をぎゅっと抱きしめる。
体はひどく冷たかった。かなの匂いがする。シャンプーの匂いだ。

「ごめんね。こんなんで泣いて」声が少し落ち着いた気がした。

「ううん。僕が悪かった」

突然かなの携帯電話がなった。かなはぱつとぼくの腕をほどき、
ディスプレイを見る。

「お父さんから」娘を心配しているのだろう。

「でないの？」

「うん。泣いているこえ聞かれない」

かなは慌てて鞆からティッシュを取り出し、豪快に鼻をかんだ。
ちょうど着信音がやんだ。

「へへ。声大丈夫かな？」

「うん。大丈夫だと思う」

お父さんかけ直す。

「あ。お父さん。うん。いま帰っているところ。学校の近く。え？

うん。わかった。じゃあコンビニで待ってるから」

「お父さん、近くにいますって」

「迎えに来てもらうの？」

「うん」

「じゃあ、コンビニまで送るよ」手をそつと差し出す。かなは照れ
くさそうにそつと握った。

かなをコンビニまで送り学校に戻ったのは九時半だった。校門はすでに閉まっていた。肌寒い風が吹く。もうすっかり冬の匂いだ。校門の横にある塀をなんとかよじ登り、校内に入った。警備員に見つかるとめんどくさいな。急いで済ませよう。慌ててグラウンドに向かった。学校は暗かった。明かりもなく、誰一人いない。物音ひとつしない。気味が悪い。さつさと帰ろう。グラウンドも暗く容易にはかごが見つからない。目を凝らしかごを探してみる。あったあった。かごを拾い、部室に向かった。部室に向かう道も暗く、誰もいない。遠くから電車が通る音がする。細い道を抜け、部室塔に着いた。部室塔の前もだいぶ暗くなっていた。非常灯だけが頼りだ。さつさと帰ろう。サッカー部の部室は二階の一番奥だ。階段を上がり、部室に向かう。階段を登る音が辺りに響く。ポケットに手をつ込む。ん？鍵がない。さっきキャプテンから預かったのに。全部のポケットに手を入れ探す。ない。どこにもない。ついてないな、ホント。どこかに落としたのかな。はー。また怒られる。大きなため息をついた。とりあえず鍵を探しにいかないと。僕は辿った道を出し出す。怪しいのはどの変だろ？校門付近かな？塀をよじ登った。こののままじゃ家にも帰れない。部室の扉を見つめた。もしかしたら開いてるかもしれない。そんな淡い希望からだった。正直、期待していなかった。部室の扉は開いていた。

僕は恐る恐る中に進んでみた。電気をつける。あれ？スイッチを押したのに明かりが灯らない。天井の電灯を見つめる。蛍光灯がないじゃないか。誰だよ、こんないたずらする奴。田中か？いやただ単に切れただけかもしれないじゃないか。疑うのは良くないよな。うん。そういやあいつ何してたんだろ？もうさすがに帰ったよな。ん？かすかな異変を感じた。匂いが変わっている。あの独特の匂いに何かが加わっている。この匂いなんだろ？どっかで嗅いだ匂いだ。

ふと後ろに気配を感じた。ふり返るまもなく、頭に鈍い衝撃が走る。床に激しく叩きつけられた。後頭部からおびただしい量の血がこぼれてくるのが見える。僕の頭の周辺に血の海ができる。マフラーも血に染まる。せつかくのプレゼントが。あ、こりゃだめだ。目の前が真っ暗になる。死ぬ。死ぬのか。いやだ。なんで僕が。くそつ。誰だよ。心当たりなんて僕にはないぞ。犯人の顔を見たくても、まったく動けない。まぶたが重すぎて開かない。声もしぼり出せない。犯人の立ち去る音が聞こえる。誰なんだ？くそ。ひどく寒くなってきた。背中にはいやな冷たい汗がどつと沸き、体は小刻みに震える。のどはからからだ。間違いない。僕はきつと助からない。最後の最後に浮かんだのは、かなの泣き顔だった。自然と涙がこぼれていく。僕のせいで、かなを苦しめるのか…

「かな…ごめんな」

なんとかしぼり出した声は彼女に届いただろうか。涙は血に紛れ消えていく。

僕はあっけなく死んでしまった。殺されてしまった。

けたたましい音に起こされた。

何事かと飛び起き、原因を見つめる。「ジリリリリ！」一昨日から僕の部屋に来た新しい時計だ。新しい真っ赤な爆音時計。心臓が激しく高鳴っているのがわかる。頭が痛い。「相変わらずうるさいな」ため息まじりに呟きアラームを殴り止めた。ディスプレイには十一月二十四日と表示されている。布団に入ったままの状態で、半開きの目をもう一度時計に向ける。あれ？そーいや、いつ寝たっけ

？記憶がはつきりしない。記憶の欠片を手繰り寄せる。待てよ、この時計をセツトするはずがない。後頭部を掻いた。痛い。昨日よりも痛い。わけが分からない。もう一度時計に目をやる。十一月二十四日だ。ベットに腰を下ろしたまま部屋を軽く見回す。僕の部屋だ。いつもの僕の部屋だ。トラさんを見る。今日は餌をあげる日だ。トラさんには、二日に一回餌を与えている。昨日はあげなかったから今日はあげないとな。他所では知らないが僕の家では二日に一回だ。朝にあげるんだ。多分これで合っていると思う――

「もつとくれよ。足りないよ。幹久」

「何いつてんだ。二日に一回でいいよな？あまり食いすぎると病気になるぞ」

「そうか。まあ昨日餌もらったし今日はいらないよ。それより掃除してくれよ。掃除。それに日光浴もしたいな」

「え？」

「だから掃除してくれっていつてんの」

「そうじゃない。昨日餌やってないだろ？」

「そうだっけ？ならやつぱりちよーだいよ」

「本当に昨日餌やったのか？」

「キミがやっていないって言うならやってないのかもね。ボクは知らないよ」

「あつ思いたよ。そうそう。キミ騒いでたよ。試合がどうか言ってたな。雑に餌を投げ入れたんだ。まったくひどい男だ」

「それは日曜日だろ？つたく、今日は火曜日――」え？時計のディスプレイには月曜日と写っている。壊れてんのか。いや電波時計だから時間がずれるわけがない。そうだ。携帯は？携帯なら。慌ててシルバーのスライド式の携帯をずらした。なつ。ディスプレイには十一月二十四日月曜日と表示されている。痛つ。後頭部に激しい痛みを感じる。ちっちゃいおじさんが激しく叩いてくる。このやる。体がふらふらする。僕はそのままベットに倒れこんだ。少し眠ろう。意識が遠くなる。

「幹久。幹久！」父の声がする。

「たくつ、もう八時だぞ。さつさと起きるか」

はいはい。そう何度もたまされるか。時計を見た。八時だ。え？もう一度見る。八時だ。たまされた。父は僕を起こすときわざとぎりぎりの時間だと嘘をつく。毎回それなら騙されないのだが、たまに本当の時もあるから性質が悪い。今回は本当だった。

「なんで起こさないんだよ」

「なんども起こしただろうが」

「車で送ってやるからさつさと準備しなさい」

「うん。ちよつと待って」

あれ？なんで父さんがいるんだ？確か今日から出張だったはずだ。

「そうそう。幹久、父さん今日から——」

「出張だろ？」

「？？あれお前に言っていないと思うけど。母さんから聞いたのか？まあいいか。早くしろよ」

「……」

「あんさ、今日頭痛いから休んじやだめ？」答えは分かっている。でも一応聞いてみた。

「ダメだ」即答だった。

「いいから早く準備しなさい」

「わかったよ」話をさつさと切り上げるようにそう言った。

おかしい。何かがおかしい。夢？夢だったのか。いやそんなわけない。途切れ途切れだがはつきりと記憶に残っている。どういうことだ？今日はまた僕の誕生日なのか？もう一度時計を見る。十一月二十四日八時少し前だ。やばっ。遅刻してしまう。携帯を確認する。かなからの着信履歴があった。とても返信できない。やばい。時間がない。また遅刻する。顔を洗いに洗面所にダッシュした。軽いパニック状態だった。

第一話（後書き）

コメント、アドバイス等あれば、遠慮なく下さい。楽しみにしています。

もしかしたら編集し直す可能性もあります。

二日目

急いで準備を済ませ、車に乗り込む。白いセダンだ。もう八時十五分だ。後一五分。とりあえず間に合いそうだ。

「シートベルト」

「うん」かなにメールを送りながらそう答えた。

「いいかげん一人で起きれるようになれよ」

「母さん送ってたら、まだ寝てるんだもんな」

「うん。母さんどこら辺にたってるの？」

「小学校前の交差点まで送ってたからそのへんだろ」あれは当番制だ。二ヶ月ぐらいに一日だけだったはずだ。たしかに、母さんは昨日も行ってたはずだ。もしかしたら昨日は勘違いで、本当は今日だったのかもしれないけれど。さつきから頭にあるひとつの考え。あまり考えたくないが、十一月二十四日がグループしているんじゃないか。そう考えれば辻褄が合う。それに今朝の占いも昨日とまったく同じだった。全部ちゃんと集中して聞いてたわけではないけれど。最下位いて座も、内容も完璧に同じだった。テレビ局がこんなミスをするか？ありえるかもしれないけど、昨日と同じことがこうも立て続けて起きるとは考えられない。夢ではない。正夢ではとても説明がつかない。リアルすぎる。リアルすぎるんだ。でも父さんの行動を見てると昨日とは違う。大筋は一緒だけれど、昨日は送ってもらってはいない。僕の行動しだいで結末が変わるのかもしれない。コンビ二前を通過する。かなはいいない。昨日のこと、現実にはおそらく今日起こることだが、遅刻ばかりして時間を取ってくれないと言われたばかりなのに、また寝坊だ。申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「そうそう。誕生日おめでとう」

「ん。ありがと」

やっぱり誕生日だ。いくらなんでも手の込んだいたずらとも思えな

いしな。お、学校の近くだ。登校している生徒がちらほらいる。

「ありがとう。もうこの辺でいいよ」シートベルトを外した。

「ちゃんとみんなに謝るんだぞ」

「倉田。くらた！」 僕を呼ぶ声がする。前の方に、校門に向かう階段から金髪、長身の男が手を振っている。あきらだ。南あきら。昨日（一回目の十一月二四日）とまったく同じ時間だ。やっぱり大筋は変わらないな。あきらが走ってくる。

「お前、昨日試合遅刻したんだって？ しかも寝坊で。不戦敗になったんだろ？」 同じ話だ。ため息をぐつとこらえる。あきらはこの時点で退部を決めていたのだろうか。何はともあれ、チャンスだ。もしかしたらあきらが辞めなくてすむかもしれない。とりあえず自然に突破口を探さなくては。

「あきらも来なかったんだろ？」

「ああ、えりがな……」 アキラはバツが悪そうに下を向き呟いた。

「妹ちゃん、どうかしたのか？」

「まあ、ちよつとな」

「何年生だっけ？」

「五年生」

「病気かなにかか？」

「ああ。まあそんなとこ」 煮え切らない返事だ。

「幹久君！」 そうだった。この時間はかなも来るんだった。

「かな、ごめん今日は父さんと車できたんだ。今日出張で出るの遅くてさ。連絡遅くなってごめん」

「そっか。誕生日だもんね」

「あ、幹久君、誕生日おめでとう」 袋を少し隠した。昨日は気づかなかったな。

「お、誕生日か。おめでとう」 あきらがニヤニヤ顔でそういった。ホームルームを告げるチャイムがなる。僕たちは慌てて走り出した。良かった。今日はかなも一緒だ。

「幹久君、なんで笑ってるの？」
「ん、別に。なんでもないよ」

教室に入ると、僕達に冷たい視線がそがれた。サッカー部のメンバーからだ。田中が近寄って来る。でっかい図体を揺らしながら歩いてくる。昨日謝ったとはいえ現実では謝ってないことになるのだろうか。また謝らなくてはならないな。正直、面倒だ。

「またギリギリか」

「今日は遅れずに来れるんだろうな？」低い声で尋ねてきた。やっぱりか。昨日と同じやり取り。まあ昨日と同じ感じで謝れば大丈夫だろ。

「ああ、必ず行く。今日からは心を入れ替える。二度と遅刻はしないよ。迷惑かけてすまんかった。反省してる」教室中に不穏な空気が立ち込めている。二回目だからか、結果を知っているからか、前より気が楽だった。

「ふん。お前みたいにへたつぴでもやる気がなくてもうちには必要なんだ。次は絶対許さないからな」

「キャプテンから何か罰があるらしい。それで許してやるよ」田中はあきらのほうを向いた。

「あきらも、バイトもあるし妹さんのこともあるんだろうけど、連絡くらいできるだろう。電話にも出ねーしよ」

「知ってるのか？」あきらは机の上に座り、見上げて尋ねた。エリちゃんのことだ。ここだ。

「あきら。僕にも理由を教えてくれよ」

「僕がいえる立場じゃないことは分かっているけどさ、力になりたいんだ」

「監督ん所にいくのはそれからでもいいだろ？」

しまった。話が急すぎたかな。

「…」

「後で話すよ。話し聞かれないしな」あきはちらつと教室を見渡した。

「まあ、なんか事情があるのは知っている。だがな、特別扱いする気はないからな」さらに田中は僕らに向け低い声で、憎たらしい感情をたつぷり込め

「人数さえいれば、お前ら辞めさすのに」結局、これは言うんだな
「はは」

乾いた笑いで答えた。頭をぼりぼり掻く。ほかのメンバーにも謝罪を済まし、席に向かった。グランド側の後ろから三番目の席だ。グランドと校門がよく見える。もう完全に遅刻からか三年生の遅刻者が歩いていく。昨日と同じだ。同じ人。この人は、もし僕が今日から永遠に抜け出せなくても、ずっと遅刻をし続けるのだろうか。そんな考えが浮かんだ。何考えてんだ、僕は――

「倉田君。おはよう」右後ろから声がした。

「うん、京子ちゃんもおはよう。」僕は腰を下ろし、かばんを落書きだらけの机の横にかけた。

「不戦敗だって？」田中とは違い、からかう感じた。昨日と同じ。

「うん」田中たちの視線を感じる。

「寝坊しちゃって。反省しているよ」

「なんか、倉田君らしいね」やっぱり昨日と同じだ。話を変えてみよう。何かヒントを得られるかも。そうだ。

「京子ちゃん、もしも、もしもだよ、今日が昨日とまったく同じでさループしているって気づいたらどうする？」

「へ？意味わかんない。突然なに？」

「うーん、説明しにくいんだけど、今日今から起こることの大筋が分かるんだよ。そうになったらどうする？」

「だったら、今日の英語の小テスト、満点じゃん。やったね」京子の白い歯がこぼれる。

「はは。そうだね」残念ながら満点取れそうもない。どんな問題かまったく覚えてない。

ドアが勢いよく開けられる。先生だ。

「おい、席に着けー、ホームルーム始めるぞ」

京子ちゃんと会話を終え、前を向いた。黒板はきれいだ。担任の岡村先生が入ってくる。今日もつなぎ姿。ところどころにペンキがついている。岡村先生は教壇に両手を着きながら、簡単に連絡事項を述べると足早に美術室に向かっていった。昨日とまったく同じだ。ふー、間違いない。二度目の十一月二四日だ。

チャイムが鳴る。一限目は数学だ。昨日と同じ内容。復習する気分にはとてもなれない。

先生の声が響く。はじめに宿題の答え合わせを黒板でする。一人、また一人と名前が呼ばれ、前に解答を書きに行く。指名された人物の悲鳴が聞こえる。僕は今日は当たらない。やっと落ちついて考えられる。まず状況を整理しよう。なぜだか分からないけど、今日は二度目の十一月二四日だ。おそらくループしている。

ちよつと待てよ。何かがおかしい。後頭部をさつとなでる。良かった。ちっちゃいおじさんは今は休憩中らしい。え？ちっちゃいおじさん！？まてまてまて。確か昨日もいたはずだ。朝起きてからずっと、僕の後頭部を殴り続けていた。どうしたことだ？つまり、これは――

「倉田くん、宿題やった？」京子ちゃんだ。

「うん。はい」ノートを手渡す。

「サンキュ」僕のノートを持ち黒板に向かっていった。

えっと、どこまで考えたっけ？そうだ。ちっさいおじさん。昨日、正確には一回目の十一月二四日もいた。ということは……どういうことだ？分からない。何か引つかかるけど何か分からない。何かピースが足りない。そんな気がする。先生が答え合わせを始める。外を見つめる。相変わらず曇天だ。なんでこんなことになったんだろう？とりあえず昨日の一日を辿っていこう。うん。そうしよう。まず

あの時計で起こされたよな。で、二度寝してしまい、父に起こされた。その後、コンビニに向かい、かなと一緒に登校。それで校門であきらに会い、教室に向かった。その時はかなとは一緒じゃなかった。田中に謝って、放課後前にあきらが辞めるっていいだして、それで、一人で部活にいったんだ。部室には清田たちがいて、さきに一人でグラウンドに行った。で、みんなに謝って、それで罰として片づけを僕一人でしたんだよな。あ。部室の掃除は今日の昼休みにやっとなくなっちゃ。えーと、それから、かなだ。そう。かなのこと忘れて泣かしちゃって追いかけたんだ。それから——いたっ。ちっちゃいおじさんが働き出した。机に突っ伏す。何だこれ？痛すぎる。死にそうだ。全身の毛穴から汗がどつとあふれる。ちよつと本気出しすぎじゃないか。僕はちっちゃいおじさんを呪うことを忘れずに、記憶のかけらを引きずり出した。そうだ部室の鍵を失くしたんだけど、何故か開いていて——

すべてのピースが埋まる。カチツという音が聞こえた気がした。全身に寒気が襲う。後頭部がひどく熱い。吐き気を必死で抑えた。嘘だろう？なんで、なんでこの僕が殺されなくちゃいけないんだ？机に突っ伏したまま必死に涙を堪えた。僕は殺されたんだ。それも最低二回以上だ。あのちっちゃなおじさんの痛みも、おそらく殴られたときの痛みの一部なんだ。おじさん、報せてくれてたんだな。「前はループしてるんだぞ。いい加減に気づかないかって。いったい何度殺されれば気づくんだって」こんな具合に。知らずに呪って悪かったよ。それにしても、いったい僕は誰に二回以上も殺されたんだろう。誰だ？誰なんだ？誰もが怪しく見える。

「倉田君、ノート」ノートでつんつんと僕の肩を押す。無言でそれを受け取った。

「ありがと。ホント助かったよ」

宿題の答え合わせが終わったようだ、昨日とまったく同じ退屈な授業に入る。

昼休みまで保健室で寝ていた。と言っても寝ることはできず、目を閉じて横になっていた。痛みも引き、吐き気も止まった。ベットから起き上がる。軽く背伸びをした。ベットは全部で三台。僕のほかに誰もいない。保健の先生もいないみたいだ。薬品の独特の匂いが鼻腔をくすぐる。もう昼休みの時間だ。さてと。立ち上がり洗面台に向かう。良かった。顔色はだいぶましになった。よし。顔をぱちんと叩く。部室の掃除に行こう。僕は僕の殺害現場に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7998q/>

リピーテッド バースデイ

2011年3月19日23時10分発行